

高島屋史料館
TOKYO

—さらに—
装飾をひもとく

日本橋の建築・再発見

TAKE FREE

もっと
楽しむ

26冊

選書・文 五十嵐太郎＋菅野裕子

01

『装飾をひもとく：日本橋の建築・再発見』

五十嵐 太郎 / 菅野 裕子 (著)

青幻舎

2020年の同名展覧会の展示を書籍化したもの。日本橋高島屋、日本銀行本店本館、三井本館、日本橋三越といった日本橋地域の建築を中心に取り上げ、細部・装飾に焦点をあて解説しています。松田行正さんによる造本もかなり凝っていて、綴じ糸が見えるコデックス装というのですが、ページがぴたと平らに開いたり、カバーをめくるとかわいい赤い糸が見えたりします。一番驚かされるのは、表紙と裏表紙が、折りたたまれた地図や図版が開く仕掛けになっていることです。(s)

02

『様式とかたちから建築を考える』

五十嵐 太郎 / 菅野 裕子 (著)

平凡社

西洋建築史と接続させながら、日本近代から現代建築まで、豊富な挿図・写真を用いて解説しています。特に古典主義建築の柱頭ディテールをこれだけ詳細に解説したものは、海外でもほとんど類書がないですが、これを手がかりにして、読者の皆様に身の回りの近代建築をどんどん再発見していただきたいという願いを込めて作りました (pp.258～289)。(s)

03

『横浜の名建築をめぐる旅』

菅野 裕子 / 恩田 陸 (著)

エクスナレッジ

横浜の近代建築32棟について、建築の形や空間の雰囲気を楽しんでいただきたいというねらいで書きました。小説家恩田陸さんは、横浜の街をジュークボックスにたとえていらっしゃいます (本書p.189ページ)。たしかに、横浜には西洋風の銀行、教会、山手の洋館といったバラエティに富んだ建物が、コンパクトなエリアにひととおり揃っているのが散策しながら見て回るにはぴったりです。その場の空気感まで写しこんだような、本多康司さんの名写真も必見です (例えば pp.107、136、152)。(s)

04

『世界の名建築歴史図鑑』

五十嵐 太郎 (著)

エクスナレッジ

古代から現代まで、建築の歴史を理解するうえで、重要なキーワードを紹介する本。見開きの単位によって、右ページに建築の様式、運動、宣言、概念、組織などに関するコンパクトな解説、左ページに関連する写真や図版を配した。新しい項目としては、「コンピューショナル・デザイン」、「アクターネットワーク」、「タクティカル・アーバニズム」などを含む。(I)

05

『建築 MAP 東京 mini』

ギャラリー間 (著)

TOTO 出版

累積で11万部超えとなり、建築書としては異例のベストセラーとなった本の携帯版。画期的だったのは、地図が見やすいこと。今から振り返ると、バブル期の華やかなポストモダン建築の遺産台帳にもなっている。五十嵐は、534件のうち約1/5の作品解説を執筆、あるいはライトを担当しました。(I)

06

『建築 MAP 東京 mini・2』

ギャラリー間 (著)

TOTO 出版

大ヒットとなった企画の第二弾。1990年代から2000年代初頭の建築をとりあげている。バブル崩壊後も変わらず、東京に現代建築が数多く誕生しているが、前とは違い、新築だけでなく、リノベーションも含めたことに、時代の変化が刻印された。五十嵐を含む、監修者による座談会も収録。(I)

07

『あいち建築ガイド 歩いて楽しむ街ミュージアム』

五十嵐 太郎 (著) / あいちトリエンナーレ実行委員会 (監修)

美術出版社

五十嵐が芸術監督をつとめたあいちトリエンナーレ2013にあわせて制作した本。

会期中は街なか展開で、美術館の外にも現代アートが展示され、来場者がまわることから、ついでに建築を鑑賞してもらうことを意図した。通常の建築ガイドと違い、現存しない名建築やインテリアの物件も収録している。(I)

08

『誰のための排除アート？ 不寛容と自己責任論』

五十嵐 太郎 (著)

岩波書店

いわゆる排除ベンチが都市に増殖していく状況を分析した本。ちなみに、英語では「アート」という言葉を使わず、「Hostile Architecture (敵対的建築)」と呼ばれる。これらは言葉で禁止するのではなく、デザインによって行為を限定している。そうした意味では、建築の装飾や様式と同じく、かたちによるコミュニケーションの一種だろう。(I)

* 西洋の建築と美術

09

『世界建築事典』 Fleming, John / Honour, Hugh / Pevsner, Nikolaus (著) / 鈴木博之 (翻訳)

鹿島出版会

西洋建築史を中心とし、古代から近代までをカバーした事典。英国のペンギンブックスで出版されて以来、世界中で読み継がれていますが、最も美しい装丁はこの日本語版だと思います。エディット

リアルデザインで一世を風靡した杉浦康平氏によるデザインのおかげで、手に取るだけでうれしくなる事典です。解説文の長さや図版の数のバランスがよく、巻末の欧文索引も重宝します。(S)

10

『西洋建築史図集』

日本建築学会（著）

彰国社

カラー刷りの美しい本がたくさん並ぶ今日、一見味気なく見えるかもしれませんが、小さい白黒写真にはどの類書にも負けないほどすばらしいものがたくさんあります。各頁ごとに図版に番号が振られ、後半の解説文が対応するという、ごく単純な構成ですが、これは実際とても使いやすいものです。信頼できる解説がびっしりつまった本書は、間違いなく一生ものですが、表紙もそれに見合う頑丈さです。(S)

11

『建築史の基礎概念：ルネサンスから新古典主義まで』

Frankl, Paul（著）／武沢 秀一（著）／越後島 研一（著）／香山 寿夫（著）／宇佐見 真弓（翻訳）

鹿島出版会

H・ヴェルフリンの『美術史の基礎概念』と並ぶ古典的名著。西洋の1420年から1900年までの建築の変遷を、微小世界（マイクロコズム）の感覚を生むものから、大宇宙（マクロコズム）の断片で

あることを想像させるものへという、非常にスケールの大きな物語として描き出しています。内部を実際に歩く体験の分析からは、今も昔もその建築の中には人間がいたという当たり前のことを再認識させられます。歴史的建築を扱っていますが、建築空間論や建築形態論の一つとしても読めるものです。(S)

12

『建築の七つの力』

鈴木 博之（著）

鹿島出版会

7つのテーマ、連想、数、ゴシック、細部、模倣、地霊、過去という切り口から建築が語られます。各章はそれぞれ20ページほどですが、深い内容に時間を忘れるほど引き込まれ、読み終わると一つの思考の旅を終えたような気持ちになります。多くの示唆に富んでいて、何度も繰り返し読んでいきたいと思える一冊です。(S)

13

『西洋の名建築がわかる七つの鑑賞術』

中島智章（著）

エクスナレッジ

ゴシックの大聖堂やヴェルサイユ宮殿といった西洋の名建築について、どんな風に鑑賞すればよいのか詳しく解説されます。目次にも一覧されていますが、各節ごとにわかりやすい見出しがつけられ、これに沿って読んでいくと自然と西洋建築史についても学べるという構成です。パリのノートルダム大聖堂の火災の

ような新しい出来事も扱われていて、入門者から専門家まで幅広い読者の好奇心に答えてくれます。驚くことに、本書のすばらしい写真も、そのほとんどが著者自身によって撮影されたものです。(S)

14

『世界の名建築解剖図鑑 新装版』

オーウェン ホブキンス (著) / 伏見 唯 (編集
| 監修) / 藤井 由理 (監修) / 小室 沙織
(翻訳)

エクスナレッジ

西洋建築を以下の三章構成によって図解した本である。第一章は各種の様式やビルディングタイプ (教会、ヴィラ、高層建築など)、第二章は構造 (アーチや鉄骨など)、第三章は細部 (石積み、タイル、装飾など) をとりあげる。それぞれの項目は、豊富な図版や写真によって説明され、ぱらぱらと眺めるだけでも楽しい。(I)

15

『ロマネスク美術革命』

金沢 百枝 (著)

新潮社

西洋の中世美術史は、モチーフをキリスト教と結びつける図像学が根強いが、本書はかたちそのものを鑑賞する愉しさを思い起こさせる。実際、決まったルールにもとづく古典主義の呪縛から解放された中世の建築は、石工たちが自由な造形の装飾を展開していた。著者によれば、ロマネスクは独自の感覚的な表現を創造した美術革命だった。(I)

16

『CATHOLICA カトリック表象大全』

スザンナ イヴァニッチ (著) / 金沢 百枝
(監修) / 岩井 木綿子 (翻訳)

東京書籍

カトリックにまつわる視覚文化が、「教義」「信仰の場」「靈性」という3部で分けられたユニークな構成の本。美術史や建築史の名作も並んでいますが、特に心奪われるのは人々の生活の中にある祝祭や日用品の数々です。手作り感のある奉納物 (p.164)、ヨーロッパの町角にある小さな祭壇 (p.176)、そしてリオのサンバ・カーニバル (p.198) まだが、本書では信仰の形の一つとして位置づけられます。世界各地に行き渡ったキリスト教が、過去から現在までたしかに生き続けていることが実感できます。(S)

17

『英国建築の解剖図鑑』

マシュー・ライス (著) / 中島 智章 (監修)
/ 岡本 由香子 (翻訳)

エクスナレッジ

親しみやすいイラストによってイギリスの建築史を図解した本。原タイトルは「Rice's Language of Buildings」となっているように、まさに建築の文法を説明し、その構成要素となる言語をていねいに読みとく。イタリアやフランスと違い、チューダー、ジャコビアン、クイーンアン、リージェンシー、ヴィクトリアンの様式などを含むのが、イギリスらしい。(I)

映画『ハリー・ポッター』シリーズ 公式 美術設定&図面集

ジョディ・レベンソン (著) / 神武 団四郎
(監修) / 富原 まさ江 (翻訳)

玄光社

hogwarts城など、有名な映画シリーズの様々な場面に登場する建築のみならず、室内の家具や道具にいたるまで、細かい寸法を書き込んだ詳細な図面を数多く掲載している。こうしたディテールへの徹底的なこだわりが、ファンタジーの世界にリアリティを与えていたことに驚かされた。(1)

*日本の建築入門

『古建築の細部意匠』

近藤 豊 (著)

大河出版

日本の古建築における装飾を知るのには、この本をおすすめしたい。写真だけでなく、むしろていねいに描かれた図版が、臺股や木鼻など、細部のバリエーションのどこを注目すべきかをわかりやすく伝える。実際、「装飾をひもとく」の展示や書籍でも、和風の装飾を判断する際、これがもっとも参考になった。(1)

『プレモダン建築巡礼』

磯達 雄 (著) / 宮沢 洋 (イラスト) / 日経
アーキテクチュア (編)

『日経アーキテクチュア』の編集者だった二人の建築巡礼シリーズは、『昭和モダン建築巡礼』や『ポストモダン建築巡礼』など、これまでに数多く刊行されたが、明治や大正時代を含み、様式建築も対象としているのは、この本のみである。日本銀行、東京駅、京都国立博物館、赤坂離宮などの魅力が、磯の文章と宮沢のイラストによって解き明かされる。(1)

『路上観察学入門』

赤瀬川 原平 / 藤森 照信 (著) / 南 伸坊 (編)
筑摩書房

赤瀬川原平や藤森照信らが、1986年に路上観察学会を結成し、同年にこの本を刊行した。街を歩き、マンホール、煙突、看板、建物の断片など、路上で様々な面白いモノを発見し、それらを愛でる。今和次郎の考現学を継承しつつ、無用になったトマソン階段など、意味のズレに注目する部分は、1980年代の都市記号論とも共振する活動だったと言える。(1)

『看板建築図鑑』

宮下 潤也 (著)

大福書林

関東圏を中心に日本各地の看板建築を調査し、そのイラストを精緻に描きつつ、意匠を解説している。注目すべきは、いわゆる建築家による様式建築ではない意匠に対し、古典主義のヴォキャブラ

リーを駆使しながら、真正面から言語化を試みていること。建築探偵団はここまで細かく分析しなかった。『装飾をひもとく』と同じ志をもった本である。(1)

23

『教養としての建築入門 見方、作り方、活かし方』

坂牛 卓(著)

中央公論新社

建築は美学だけでつくられるわけではなく、様々な要素が絡み合い、雑種的な性格をもつ。そこでサブタイトルの「見方、作り方、活かし方」が示すように、本書は第一部「鑑賞論」、第二部「設計論」、第三部「社会論」から構成された、一般向けの入門書になっている。著者は日建設計につとめた後、大学で教鞭をとり、設計者の視点も入ることが大きな特徴だ。(1)

*テクノスケープ

24

『立体交差／ジャンクション』

大山 顕(著 | 写真)

本の雑誌社

2007年に刊行された衝撃的な写真集『ジャンクション』を再編集し、その後に撮影した物件を加えたもの。土木愛あふれる著者は、日本橋上の首都高について、様々な折り合いの過程を積層した風景に対し、単純に「取り戻す」(政治のスローガンみたいだ)とは、東京の歴史への侮辱だと指摘している。(1)

25

『電線の恋人』

石山 蓮華(著)

平凡社

しばしば電線は景観を醜くする悪い要素として批判される。だが、文筆家・俳優の著者は、街中で出会う電線愛を愛でるだけでなく、分類し、その背景を調べて学び、さらになぜ好きなのかを考察する。電線愛を語る一冊。彼女によれば、電線とは「都市の血管であり神経」であり、「人の生活の軌跡そのもの」だという。(1)

26

『アニメ建築 傑作背景美術の制作プロセス』 シュテファン・リーケルス(著) / 和田 侑子 (翻訳)

グラフィック社

「アニメ背景美術に描かれた都市」展(金沢建築館)を企画したドイツ人のキュレーターによる書籍。「AKIRA」、「機動警察パトレイバー 劇場版」、「GHOST IN THE SHELL」など、日本のSF系アニメに登場する背景美術を紹介する。ゆえに、キャラは一切登場しない。驚くほどリアルに描かれた建築や都市が、近未来の世界観を物語ることがよくわかる。(1)

選書コメント：文末（I）は五十嵐太郎、（S）は菅野裕子

五十嵐太郎（いがらし・たろう）：

「さらに装飾をひもとく」展 監修

パリ生まれ。東北大学大学院工学研究科教授。博士（工学）。建築史・建築批評。1992年東京大学大学院修了。ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展2008日本館コミッショナー、あいちトリエンナーレ2013芸術監督。展示監修・キュレーションなど多数あり。著書に『モダニズム崩壊後の建築：1968年以降の転回と思想』（青土舎、2018年）、『建築の東京』（みすず書房、2020年）、『現代建築宣言文集〔1960－2020〕』（共著、彰国社）など多数あり。

菅野裕子（すげの・ゆうこ）：

「さらに装飾をひもとく」展 協力

横浜生まれ。横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院特別研究教員。博士（工学）。西洋建築史。1993年横浜国立大学院修了、2006－07年フィレンツェ大学建築学部客員研究員。著書に『装飾をひもとく：日本橋の建築・再発見』（共著、青幻舎、2021年）、『横浜の名建築をめぐる旅』（共著、エクスナレッジ、2021年）、『様式とカタチから建築を考える』ほか。

展示情報

さらに装飾をひもとく

一日本橋の建築再発見

2024年9月14日（土）→2025年2月24日（月・休）

10:30-19:30 入館無料

高島屋史料館TOKYO 4階展示室

東京都中央区日本橋2-4-1 日本橋高島屋S.C. 本館

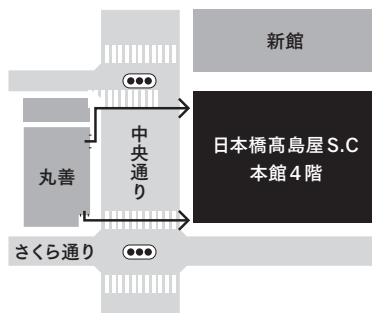
休館 月・火曜（祝日の場合は開館）、

年末年始（12月30日～1月2日）



丸善日本橋店から

高島屋史料館TOKYOへのアクセス



中央通りを挟んで向かいの建物です。